

まんとさく

新見から世界へ

学生部次長（国際交流担当） 山内 圭

社会の国際化が進む中、本学の国際化も着実に進んでいます。

平成十四年七月三十一日～八月八日、タイと大韓民国への研修旅行（学生四名、教員一名参加）が実施されました。また、毎年恒例となっているオーストラリア研修旅行（八月、学生十七名、教員三名参加）も今年度は第五回を重ねました。そして十月十七日、大佐町の姉妹都市、米国ニューヨーク州ニューヨーク市訪問団が本学を表敬訪問されました。一行は看護学科二年生の英語の授業に特別ゲストとして参加され、とても暖かい交流ができました。平成十五年一月には看護学科の住山亜希さんが、メルボルン・ランゲージ・センターのご好意による九カ月のオーストラリア留学から帰国しました。その他にも最近海外で見聞を広める学生、研究を進める教員（一例では齋藤健司先生が二年間ドイツで研究留学中）、また、本学を卒業し、外国で活躍する卒業生も増えていきます（近いうちに海外で活躍されている卒業生の特集を学報で組みたいと思います）。

これからは個々の大学の特色がさらに求められる時代になります。本学の特色として、地域にありながらも、世界を視野に入れた大学を目指していきたいと思っています。



発刊 新見公立短期大学（岡山県新見市西方二二六三の二）

〇八六七一七二一〇六三四

編集 学報編集委員会

幼児教育学科

幼稚園見学に参加して

二年次生 濱田 玲子
九月六日に、幼児教育学科二年生は、新見市立新見幼稚園に幼稚園見学に行った。

新見幼稚園では、自由保育を取り入れていた。私は、環境構成のすばらしさに感動した。特に、素材や廃材の豊富さには驚かされた。子どもたちは、この素材や廃材を使い、ままごとを楽しんだり、思い思いのものを作っていた。保育者は、自らが用意した環境の中で、自分の好きな遊びを見つめ楽しく遊ぶ子どもたちの姿を見て、保育者としてのやりがいを感じるのだろうな、と思った。

今回の幼稚園見学では、自由保育をする際の環境の構成の仕方、保育者の子どもへの関わり方などとても勉強になった。また、間近にひかえた教育実習への意欲を高めるきっかけとなった。

このように、実際の保育の現場に行くことは、普段の授業とは違った学びができるので、とてもいいことだと思ふ。

保育所見学に参加して

一年次生 嶋野 美恵
私は幼稚園に行っていて、保育園に行くのは今回が初めてだったので楽しみでした。見学させていただく



橋今保育園に到着し、バスから降りて園の中へ入っていくと、園庭で遊んでいた子どもたちが元気よく大きな声で私たちにあいさつをしてくれ、私はまず、子どもたちの元気に驚きました。

また、給食のときに、なかなかご飯を食べ始めようとしない子がいて、その子どもに対して保育士が歌を歌ったりして食べさせている様子が印象的でした。保育士と一緒に遊んでいる様子がとても楽しそうだったり、保育士の言葉かけによって苦手な食べ物をがんばって食べている様子などを見て、保育士の存在はとても大きいと思いました。設定保育、自由遊び、給食、おやつ、午睡などいろいろな場面を見学させていたを見て、子どもたちの保育園での生活を見ることができてよかったです。

小学校見学で学んだこと

一年次生 古館利江子
私は平成十四年十一月五日、小学校見学に参加し、一、二年生の授業を見学させていただきました。一年生では、たくさん壁面が飾ってあったり、授業前に手あそびのようなものをして集中出来るようにするなど幼稚園とのつながりを見ることが出来ました。また二年生では、総合的な学習の時間としてゲームを通して英語に親しむ姿もみられました。

校長先生の講話では、総合的な学習の意義や、総合学習の内容はそれぞれの学校に任されていることを知りました。思誠小学校では英語活動をはじめ、一昨年は豆腐作りをするなど子どもが楽しく活動出来る総合的な学習を目指しているということを知りました。「総合的な学習」という言葉をよく聞きますが、その意義や内容については詳しく知らなかったため、様々な事が学べ、充実した時間を過ごすことが出来ました。

施設見学に参加して

一年次生 若林 真之
見学中一番印象に残った出来事は、屋外で障害者の方々と共に農作業をしたことです。共に作業したのは年配の方が多かったのですが、年齢を感じさせない生き生きとした手際のよい作業でした。施設の先生から「昔あまり人前に出してもらえず家の手伝いばかりさせられていた

ため、体が覚えている」と教わり、障害者の方々のつらい過去を垣間見ました。しかし作業自体は、話などをしながらとても楽しく、充実したものでした。

今まで障害者と関わるのとは一歩引いていた自分がいました。正直、この見学実習も行くまでは憂鬱でした。しかし見学が終わったときは、すごく充実した気分でした。今まで生きてきた中で味わった事がないくらいのものでした。今までの自分を恥ずかしく思います。

これからはこの貴重な経験が無駄にせず、ボランティアなどに積極的に参加して、障害者の方々と関わっていきたいと思います。



第八回NCSを終えて

NCS委員長 森川 友賀

本学看護学科では、一年生が初めての実習に行く前に戴帽式に代わる会として、八年前からNCS(Nursing College Seminar)を開催しています。毎年、医療に関わる様々な分野から講師の方をお招きしています。今回は、学生にアンケートを行った結果「海外の医療について学びたい」という意見が多くあったため、「新たな医療の世界」オーストラリアの医療事情」というテーマとし、オーストラリアからニック・サンタマリアNick Santamaria先生、通訳として小川ひとみ先生にお越しいただきました。本学ではここ数年、山内先生のご指導でオーストラリアへ研修旅行に行っています。その縁で、ニック先生をご紹介します。いただきました。

企画運営を担当するNCS委員会を四月から立ち上げ、一・二年生各五名の計十名の委員でスタートしました。どのような形式の会にするのか、資料やパンフレットをどうするかなど、また、インターネットや図書館の文献などからオーストラリアの医療についての資料を探し、勉強会を開いて、様々な意見を出し合い話し合いを重ねて、少しずつ理解を深めていきました。海外の医療につ

いては、分からないことも多く、関連の先生方にも協力を求め、疑問を一つずつ解決するように努めました。さらに、海外の医療と比較するために、日本の医療制度についても理解が必要でした。そのため、前日まで一・二年生合同で日本の保険制度・医療報酬の仕組みなどについての勉強会を続けました。普段一・二年生が交流することが少ない私たちにとってとても良い機会になったと思います。

当日は、ニック先生が遅れて来られるというハプニングがありました。が、無事に会を始める事が出来ました。講演の内容は、オーストラリアの医療の現状などについてのお話でした。オーストラリアでも高齢化が問題になっているそうです。また、入院日数を減らし在宅看護を増やしていくという動きが強いそうです。

ここ数年の間にベッド数を千床から四百床まで減らした病院もあるそうです。そして、オーストラリアでは看護師・医師・その他の医療関係者との連携が密で、チーム医療が進んでいるということでした。また、ニック先生の研究テーマである褥瘡ケアについてもお話ししてくださいました。

その他、オーストラリアではアボリジニーという先住民が国民の五%程度を占めており、健康問題でも、一般の国民に比べて八倍程度糖尿病になりやすいと知りました。しかし、アボリジニーの人々は病気についてはあまり関心がないということと聞き、大変驚きました。このようにオーストラリアと日本の医療は大きく異なっています。学生の中には、将来海外での医療に関わりたいと思っている人もいます。そのような学生にとっては、今回の講演は大変興味深く、役に立つ内容だったのではないかと思います。また、私たちにとつて、他の国の医療を知ることとは、日本の医療を改めて見つめ直す良い機会になりました。質疑応答も活発に行われ、学生が今回の講演会に興味を持って臨んだということがうかがえました。

ニック先生からは「このような素晴らしい会で講演をすることが出来、大変嬉しい」という感想をいただきました。学生や教員の方々などからも「とても良い講演で勉強にな



講演：オーストラリアの医療



ニック先生を囲んで

った」という評価をしていただき、準備を進めてきた私たちNCS委員にとつては大変嬉しい反応でした。今回のNCSには多くの先生方に協力していただきました。学生だけでは分からない事も多く、御協力くださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。今回のNCSが無事に、また盛会に終えることができ、一人の委員として達成感でいっぱいです。そしてこの委員会で活動してきたことに誇りを持ちたいと思いません。

【NCS委員】

- 二年次生：森川 友賀・山田衣里子
上原ちひろ・射場 晶子
- 浅原 葉子
- 一年次生：杉山 規子・鈴木 友子
小島 美保・堀本 宏子
宇津木 藍

地域福祉学科

実習の成果はいかに？

はじめての実習

一年次生 坂根 亜希
 「どうなるのかなあ」と不安ながら始まった実習も、終わってみると結構早かったように思う。最初は何をどうしていいかわからず戸惑うことが多かったが、指導者の寮母さんが丁寧に教えて下さり、だんだんに理解が進んでくるとともに利用者の方々ともしだいに打ち解けることができ、自分なりの喜びを感じる事ができた。

普段の短大での学習では得ることのできないこともいろいろと学ぶことができた二週間だった。実習では利用者さん一人一人に合ったケアが大変重要だということを改めて認識させられたような気がする。そんななかで、いつもは見せてくれない利用者さんの笑顔に出会えた日は本当に嬉しかった。

しかし、二週間の実習で実感した最大のごときは、当然のことなのだけれども、「まだまだ技術面での学習が必要だなあ」ということ。そして、介護を実践するということは、私たちが利用者さんにしてあげる、与えるということではなく、利用者さんから教えてもらう、学ぶということだとわかったことだった。

段階実習

専任講師 藤井 敬美

短大生活最後の実習が十一月十五日に終了しました。本学では 段階実習より受け持ち利用者を持たせていただき、介護過程を展開していただきます。一年生では介護過程って何？介護に必要な情報って何？と、はてなマークの中での実習でした。それ以前に、学生の皆さんにとっては利用者さんとのコミュニケーションのとり方がわからず、介護過程どころではなかったかもしれませぬ。そんな皆さんが 段階実習では、利用者の訴えに心を寄せ、利用者のニーズに沿った介護計画の立案、実施ができる力を身につけてきたことに教員一同皆喜びを感じました。

言語障害がある利用者さんとの意思の疎通がうまくいかず、利用者さんをイライラさせて怒らせてしまったと、その関わりを悩む学生もいましたが、利用者さんの訴えを一生懸命聞くこととする関わりを持つことの大切さ、時には少し距離を置き、しかし関心はいつも向けておくことなどちよつとした助言を受けて、その利用者から逃げ出すことなく関わりを続けたことで、最後には利用者さんとのよい関係を築くことのできた学生もいました。実習終了後にその話を聞かせてくれた学生の笑顔には、専門職者としての自覚と、介護する楽しみ、満足感がうかがえました。この実習での体験を忘れることなく

卒後の糧にしていただきたいと思えます。

短大での学びはほんの一部分に過ぎません。就職してからの本場の意味での学びの場であると考えています。常に介護とは何か、自分はどうな介護をしたいかを考え続ける介護福祉士を目指してください。時には学生時代の実習を思い出してみるのもよいでしょう。きっと何かの役に立てるはずですよ。

ボランティア体験学習

施設実習の前に高齢者（障害者）施設を訪問し、コミュニケーションやケアを通して介護の対象となる高齢者（障害者）の特徴や想いなどの理解をする。また、高齢者（障害者）施設の概要（特徴）を理解する目的で、平成十四年度からボランティア体験学習を始めました。段階実習前に全員で意見交換をし、コミュニケーションやケアの難しさだけでなく、介護の楽しさ、喜びについても沢山の発表が聞かれ、よい学びの場となりました。

仕上げ

年間を通して取り組んできた地域文化演習の神楽と木工芸のふたつの授業がそれぞれ一月十七日と二十二日に終了した。神楽は女子三人、男子二人の少人数だったこともあり、みっちり池田春陽先生に指導していただき仕上げは上々。写真は二年生の藤井徳子さんの見事な恵比寿

の舞。枅の材で菓子器製作に挑戦していた木工芸班も森田翠玉先生の指導の下でそれぞれが完成。今年は何故か加色した学生が多く、色とりどりの味のある作品群となった。「楽しい時間をありがとう」は先生の弁。



道路拡幅工事はじまる

昨年、ヒューマン・タウンウォッチングを受講した池上千尋さん、平井悠美子さん、宮本倫江さん、渡辺優さんのグループがテーマとして授業で取り上げ、その後、独自に短大、坂下の県道拡幅工事の署名運動を全学学生に展開し、振興局や市役所に陳情した結果が昨年十二月に出た。まだ50mほどだが地権者の方の理解が得られ買収が完了し、目下、道路の拡幅工事が進行中。年度中には完成の予定。短大開学以来の長年の課題がひとつ解決した。

同窓会の コーナー



倉敷中央
デイサービスセンター
看護学科第五期生
平(旧姓谷上)雅由美

こんにちは。短大を卒業して早や十五年、あっといふ間のようです。卒業主婦五年間を経て、現在はデイサービスセンターで高齢者の方々と関わらせて頂いています。毎日、レクリエーションに参加したり、入浴介助に関わったり、忙しくも楽しい毎日を過ごしています。

昨年の二月、岡山県看護協会の研修会で、卒業後初めて丸川先生、古城先生にお会いしました。先生方もお変わりなく、また以前と同様に若々しくて感動しました。その時に短大のHPを教えてくださいまして早速開いてみると、時代の移り変わりを感ずると同時に、懐かしい思い出がよみがえりました。

短大の長い坂道を、毎日自転車を押しながら通った三年間が、ついこの前の事のように思えます。悩んだり迷ったり、また夢を語ったり、いろいろあったけど楽しかったな。

時々、HPを開いて元気をもらいながら、仕事と子育て、ママさんパレーと毎日頑張ろうと思います。



大町幼稚園
幼児教育学科第十七期生
越智 雅美

今までの出会い、
これからの出会い

はじめまして。私は幼稚園の先生をしています。その一番のきっかけとも言えるのが、実習で「先生」と呼んでもらったことです。その時、すごく嬉しくて、いつか本当の先生になって、そう呼ばれたいなあ、と強く思ったことを覚えています。そして今、それが現実となり、子どもたちの成長を喜んでいきます。子どもたちの日々は、毎日が出会いで、発見で、成長であることを感じています。

私は、この『まんさく』の原稿に向かうことで、懐かしい短大の頃を思い出したり、五年間の保育を振り返ったりすることができました。子どもたちだけでなく、私もたくさんの人に出会ってきたんですね。子どもたちの笑顔に励まされたり、先輩の先生から知恵をいただいたり、同僚の先生や友達から勇気をもらったり……。いつも応援してくれる人がいることを忘れず、これからも私なりに頑張っていきたいと思えます。

久しぶり！

地域福祉学科第二期生 中根 佳子
平成十四年十一月三十日、副担任

同窓会の 報告

であった岩 先生のご出席のもと、二期生の同窓会が新見で開催されました。卒業三年以上を経て久々の再会。懐かしい気持ちがいっぱいになりました。短大時代の楽しい思い出で大変盛り上がりしました。この間、結婚した人、結婚する人、ママになる人、その予定の人。そして、ずっと同じ職場で頑張っている人、新たな目標に再スタートした人と変化はありましたが、皆イキイキとした表情。これからも何年かに一度は近況を報告できたらなあと思っています。残念ながらお会いできなかった同窓の皆様、お元気でしようか。再会楽しみにしています。最後に、企画・運営を下さった福山、平林さん、お世話になりました。

看護学科第十六期生の同窓会が、平成十五年二月一日(土)岡山市のワシントンホテルプラザにて盛大に開催されました。当日は四十六名の卒業生、同伴のお子様四名、十四名の教職員が参加し、久しぶりの再会で積もる話に花が咲きました。

(卒業生の皆様、同窓会を開催されましたら、まんさく編集委員会にもご連絡ください。紙面の都合にもよりますが、できるだけ掲載させていただきたいと思えます。)

学報「まんさく」メール便り

高齢者の健康相談やデイサービス



の仕事をしています。都会では独居高齢者が多いために閉じこもりがちになり痴呆がすすむ場合が多いのです。毎日、多くの高齢者に出会い、私自身が励まされながら過ごしています。(看一・西村(太田)美恵子 大阪市老人福祉センター)

五年前、キャンピングリング中に温泉卵をプレゼントしたらプロポーズしてくれた夫と、三歳、二歳の娘息子と毎日楽しく格闘しています。今が一番幸せ?でも再就職するのを楽しみです(看九・幾島(見玉)浩恵 主婦)

学報「まんさく」や同窓会のページについてのご感想・ご要望などがございましたら遠慮なくお知らせ下さい(e-mail: mansaku@nimiti.ac.jp)。また、外国で活躍の卒業生の皆様、特集を組みたいと思っておりますので、学報編集委員会まで近況をご報告ください。

平成十四年度 卒業研究テーマ一覧

【看護研究】看護学科

総合看護

指導教員 宇野文夫・小野晴子・金山弘代・杉本幸枝・白神佐知子・木下香織・貞岡美伸

健康食品における入院患者と一般社会人の健康維持の考え方の比較

小林優梨子
服薬指導における服薬行動の変化
処方に関する比較より考える

石原可奈子
新見公立短期大学生のアレルギー性疾患による困窮調査研究

佐藤 孝光
笑いや笑顔が心理的・身体的に与える効果について「デイサービス」を利用して
いる高齢者に焦点をあてて
羽瀨 喜代
糖尿病サマーキャンプで学んだこととある糖尿病サマーキャンプに参加して

北原 久子
新見公立短期大学の学生を対象とした性感染症に関する知識と意識および情報提供による意識の実態

岡野 神奈
スウェーデンと日本の性教育の違いについて
船越干津子
海外医療ボランティアに関する研究

AMDAネパール子ども病院を訪問して
齊藤ひとみ

国際協力における看護の役割
AMDAのネパールスタディーツアー参加を通して
藤井 弓子
一つのグリーンワークから得たもの
私の看護への示唆
梶原 昌治

基礎看護
指導教員 小野晴子・杉本幸枝・土井英子

看護師の態度や医療処置に関する患者の満足度調査の分析

小笠原有紀
体圧・ズレカセンサーを用いた頭側挙上時・下降時の方法についての研究

新名 有梨
身体拘束の是非
看護師と看護学生の意識調査から
武 英理子
患者の家族が看護師に求めている看護
家族のことに焦点をあてて

嶋井 総子
採血時における看護的除痛法の効果
温電法・冷電法を用いた痛みの軽減
勝又 美穂
岡山県内の看護師の患者に対する言葉遣いについての患者の認識
患者へのアンケート調査をもとに

北條 美香
患者の情報の取扱いに関する学生の意識
看護学生のアンケート結果から
成人看護

指導教員 逸見英枝・金山弘代・景山一十三

白神佐知子・太田浩子・小野晴子・土井英子
N中学生のコンタクトレンズの使用に関する調査
住本小百合
患者のそばに居ること
成人看護
学習での受け持ち事例をプロセスレコードを基に振り返る

奥野 優美
ベースメーカー植え込み患者の日常生活の過ごし方
インタビュ調査を通して
鎌田 理絵
難病患者とその母親の心理と精神面への看護
約40年間の闘病生活を
経ている患者とその母親のインタビュを基に
木原 麻悠
実習場面を通し自己を振り返る
成人看護学で受け持った2事例から
今岡 朋子
終末期患者の家族へのアプローチ
夫を癌で亡くした家族へのインタビュを通して
土居 真子
術前患者の不安を軽減するための看護師の関わり
プロセスレコードで振り返る
勝部真沙美
易感染性の患者の看護
佐藤祐佳里
癌告知をめぐる家族の心理
家族へのインタビュと文献から考える

曾我部麻理
短期間で質の高いケアを保証する
クリニカルパス
導入経過と実践の日米比較から
兼重亜矢子
健康に問題が生じてから受診行動に至るまでの経過
初診患者十六名の聞き取り調査による
鈴木 結香

実習において受け持ち患者の不安な気持ちを受けとめられなかった場面の考察
二井戸 恵
自己のコミュニケーションを見つめる
桑原 由香
老年看護
指導教員 古城幸子・木下香織・小野晴子

シルバー人材センターの現状
山間部と都市部の比較
陣内亜樹子
独居高齢男性の日常生活とその支援への課題
入江 瞳
高齢者のQOLに与える動物の影響
一高齢者施設の取り組みを通して
河崎 智子
高齢者の介護に直面した一家族の適応プロセスとサポートについて
苗倉 由佳
看取りにおける家族の心理変化
家族へのインタビュを通して
高司加奈子
痴呆症が本人・家族に与える影響とその要因
高階 陽子
広がる地域密着型サービス
宅老所の存在
酒井 啓子
慢性疾患患者のQOLを考える
介護老人保健施設で療養中のA氏と関わって
園部 治子
小児看護

指導教員 上山和子
学童の室内遊びと視力低下との関係
室内遊びに関するアンケート調査
仲川 亜紀
アトピー性皮膚炎児を持つ母親の育児不安
西村麻衣子

児童の肥満傾向と食生活と運動との関係、学童期の生活習慣に関する調査、

長期入院患児への学習援助の必要性と看護師の役割 福家 幸恵

学童期の生活習慣と睡眠の関係、学童の生活習慣に関するアンケート調査、 古市 聡子

精神看護 指導教員 塚本千恵子・白神佐知子 精神疾患患者との関わりを通して私のコミュニケーション技法、 長尾 優美

患者との距離から学ぶこと、精神看護学実習を通して、 中西 朋子

自己の看護傾向から本来の看護を見出す、看護学実習の2事例を通して、 北國 亜矢

精神看護学臨地実習を通して患者から学んだこと 小西 永子 園芸療法について 小笠原 望 地域看護

指導教員 金山時恵・栗本一美 産業精神保健における看護職の役割、大規模事業場と小規模事業場の労働者のストレス実態を通して、

石野 千晴 沖縄県における中学生の生活習慣と健康意識の実際 伊波 美来

奄美大島の食生活と健康の関わりについて 我那覇あゆみ

祖父母の健康観と孫への関わり、食生活に関するアンケート調査を通して、 福富 恭子

継続看護における看護師の役割

亀山 恵梨 グループホームにおける看護師の役割 佐藤 由里

障害をもつ子供の母親を支援する在宅看護の役割 角森 千尋 母性看護

指導教員 貞岡美伸・福原博子・逸見英枝 青年期の月経随伴症状と日常生活への影響 梅野 友子

妊婦の望む出産、出産を経験した女性への意識調査を通して、 寶宮美奈子

胎教に関する母親の認識と実態調査 宮崎亜希子 母乳外来を通してみられた完全母乳の難しさ 安次富弥生

妊娠に伴って変化する妊婦と妊婦周辺の喫煙行動 森脇 久美 更年期障害から考えられる健康について、更年期の女性を対象としたアンケート調査による、 藤江 恵里

【総合研究】幼児教育学科

教育学（指導教員 矢藤誠慈郎） 英語活動における児童の成長と取り組みの個人差に関する研究 浅妻佐知子・佐藤 智美

保育所の福祉サービスにおける第三者評価基準に関する研究、オーストラリアと日本の評価基準の比較分析、 大西由里子・金久 弥生

保育所の幼稚園・小学校との連携に関する研究、岡山県内の保育所に対する実態調査から、 齋木香菜子

「総合的な学習の時間」についての児童と教師の意識に関する研究 濱田 玲子

音楽（指導教員 安達雅彦） ミュージカル 赤ずきんの制作 安藤 真弓・小野麻由子・加藤 愛

理・坂根 志保・福田さやか 音楽教育（指導教員 山中 文） 乳幼児期における音楽遊びについて

上田 理恵・中村 友美・根木 仁 史・丸濱智亜紀・三浦 静・三木 寛子・山本 恵美

幼児教育（指導教員 高月教恵） 絵本について、絵本製作を中心に 家本 葵子・田中かおり

積木について 齊木奈津美 思いやりの育ちと保育者のかかわり 篠原 昌美

けんかについて 中庭 美鈴 子ども理解と保育者の意識、津守 真理論を中心に、 橋本 睦美

昔話について 湊 真理子 社会福祉（指導教員 東 俊一） 世代間におけるしつけ観の違い、子育て中の親と子育て終了後の親との比較、 小川 晶子

子どもの問題行動と保育者の受け止め方、対応に関する検討 立岩 佳奈

知的障害者の自立活動に関する実践的検討、外出支援による生活の質の向上を目指して、 中尾 有里

知的障害者の意思表明・自己選択による余暇活動の実践 山室 真実

文化・娯楽施設におけるバリアフリーの現状調査、障害を持たれた方の質の高い生活の実現に向けて、 湯汲久里子

造形表現（指導教員 金山和彦） 顔の表情を造形することについての研究、動く「顔」と創作ダンス 笑顔・泣きむし・怒りんぼうの

作品制作を通して、 青山水の果・伊藤 亜紀・岡 由起

枝・尾方 純子・澤座 理恵・田中 陽子・野々宮いづみ 幼児体育・身体表現

（指導教員 片山啓子） 身体表現による舞台作品の制作、動く「顔」と創作ダンス 笑顔・泣きむし・怒りんぼう

井川 敦子・内田 敦子・恵谷 美幸・小山 早希・藤井 育実・古 川 志穂・森辻 貴子

乳児保育（指導教員 光本弥生） 保育所における「連絡帳」についての一考察 石井 智子

子育てしやすい社会環境とは、ファミリー・フレンドリー制度の現状から、 江口 幸代

自然との関わりを育てる保育についての一考察 武村奈穂・本間優子 保育所におけるアトピー性皮膚炎への対処 野宮 義矢

ままごとあそびについての研究、生活再現あそびとイメージ玩具あそびを中心に、 山口 智子

発達心理学指導教員 石橋由美） 大学生にとっての絵本の思い出

池田 佳代

絵本がさし示す子どもたちの世界へ空想世界で気分を晴らして現実に立ち戻る

池永 智美
「イソップ寓話の世界へ」ありとくりにぎりす」の分析から

岡 紀子・溝田 麻衣
ユーモアのある絵本の読み聞かせを子どもはどのように楽しんでいるか

黒木 美紀・谷山 壽子
エリック・カール絵本「はらぺこあおむし」における視覚表現と言語表現の分析

小宮路美沙
小宮路美沙

【地域福祉研究】地域福祉学科

指導教員 村中哲夫

独居高齢者の生活意識とその援助の可能性へ中山間過疎地域の高齢者へのインタビュから

指導教員 伊藤博康

健康について 国と愛媛の比較検討

足利 舞

高齢者保健福祉計画からみる地域福祉のあり方について

岡田 裕史

形態別からみた食事や飲み物の美味しさ及び飲み込み易さの比較

阿部のぞみ

障害者に対する権利の意識調査

看護学生と障害者施設職員との比較

上田 育美

難聴高齢者の聞こえの程度と社会的不利の状況及びその家族の対応に関する分析

藤井 徳子

車椅子利用者に対する施設整備の

バリアフリーの現状と課題

山根 沙樹

指導教員 岩 竹彦

山根 沙樹

親捨山のお話 光瀬 三起

おじいちゃん、おばあちゃんの昔語り 清水 美公

桃太郎の温羅伝説について 角 ひとみ

都市と妖怪 蓮井 里香

架橋による角島の変容 藤原 誠

角島の漁業 溝口 卓哉

ポックリ信仰へピンピンコロリが合言葉 山根 大知

平成 14 年度 進路状況

(2月12日現在)

内訳 学科	卒業生数 (人)	専門職 (人)	一般職 (人)	進学 (人)
看護 [21期生]	61	36 (5)	0	13 (7)
幼児教育 [22期生]	58	52 (4)	1	1
地域福祉 [6期生]	53	40 (6)	2	5

()内は、希望しているが決定していない人数

指導教員 松久保博章

介護保険制度の要介護認定について 河村 麻衣

痴呆者の要介護認定 朽網真由子

利用者のための制度 古谷 千春

訪問介護の介護型区分の妥当性 野津理恵子

介護福祉士資格の位置づけについて 福田 高之

て

て

受賞のお知らせ

平成十四年度には本学石田純郎教授が、原著『解体新書』のオランダ人翻訳者デイクテンについての研究」に対し、第八回日本医学学会学術奨励賞を受賞されました。さらに、本学小野晴子助教授が地域医療事業功労者表彰で岡山県保健福祉部長表彰を受けられました。記して慶祝の意を表したいと思います。



編集後記

たくさんの方の皆さんのご協力により、まんさく二十五号が出来上がりました。この号の編集をしながら、まんさくが、卒業生の皆さんや在学生の様子を知らせるだけでなく、原稿を書いてくださっている皆さんにとっても、仕事や学業を振り返る機会となっていることを実感し、うれしく思いました。そして、まんさくの一つひとつの記事を読み返してみることが、私たち教職員にとっても、新見公立短期大学での教育という仕事の意味を改めて振り返るよい機会になります。これをお読みになるいろいろな方たちが、それぞれの立場からそれぞれの思いで一つひとつの記事を味わってくだされば幸いです。(矢藤)

イラスト

幼児教育学科一年次生 坂田 芙美

編集委員

委員長 原 田 信之
委員 村 中 哲夫
古 城 幸子
山 内 圭
矢 藤 誠慈郎
山 崎 護